

特集：図書館などの外周環境

図書館の周辺環境を考える

牧迫 飛雄馬

1. はじめに

図書館は、静かで落ち着いた空間として多くの人々に親しまれている。日常的に利用していると、その安全性は当たり前のものとして受け止められがちである。しかし、実際には図書館の内外にはさまざまな事故のリスクが潜んでいる。転倒・転落は誰にでも起こり得る事故であり、段差や床面の状態、照明不足などの環境要因が大きく影響する。図書館では、高齢者や子ども、学生、障害のある人など、身体的条件や行動特性の異なる利用者が同じ空間を共有するため、わずかな環境の変化が事故につながる可能性がある。

近年では、地震災害への備えという観点からも、図書館の安全性を再考する必要性が高まっている。例えば、大規模地震の発生時やその直後には、書架からの図書の落下や避難時の混乱によって、思わぬ転倒や負傷が生じる危険性が想定される。

図書館における安全対策は、災害時に限らず、平常時の利用環境においても継続的に考慮する必要がある。本稿では、図書館の周辺環境に焦点を当て、転倒・転落事故の主な原因と、その予防に向けた環境整備の考え方について整理する。

2. 転倒・転落の現状

転倒・転落による事故は誰にでも起こり得るが、特に高齢者が被害の中心となっている。令和3年版『高齢社会白書』（内閣府）によると、65歳以上で介護が必要となる原因のうち、認知症や脳血管疾患（脳卒中）、高齢による衰弱に次いで、骨折・転倒は4番目に多く（13.0%）、女性では認知症（19.9%）に次いで骨折・転倒（16.5%）が2番目に多い原因となっている（図1）。

高齢者では、毎年約30%が少なくとも1回以上の転倒を経験しているとされている。転倒の多くは屋内で発生し、段差やカーペット、床のわずか

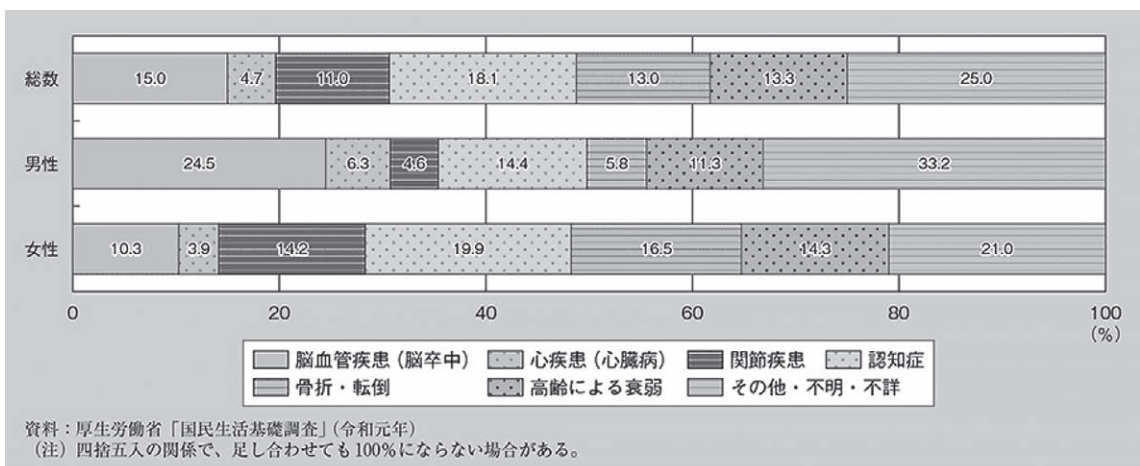


図1 65歳以上の要介護等の性別にみた介護が必要となった原因（令和3年版高齢社会白書）